

『雄薔薇無惨
騎士団長媚肉錬金術』のサンプル

著者：金目

目次

登場人物紹介

第一話 剃毛が人間性の剥奪とみなされる社会における剃毛
(サンプル掲載はここまでとなります)

(以下、製品版収録)

第二話 手コキ寸止め

第三話 玉責め、尿道責め

第四話 アナルセックス

最終話 乗馬射精、後天性ふたなり女王×騎士団長

【お願い】

この小説は金目によるフィクションであり、現実に存在する個人・団体などとは無関係です。無断転載・私的利用の範囲を超えた共有など、著作権法に触れる行為は控えていただきますようお願いいたします。

この作品は犯罪行為を推奨するものではありません。フィクションとして、お楽しみください。

作中の性行為描写はすべてファンタジーとなります。現実のセックスへの参考になさらないようお願いいたします。

登場人物

ギルベルト

騎士団長にして、呪われた女王アランナの愛人の一人。
かつて、賢者オンネスの弟子と婚約をしていたが、出世のために一方的に婚約を破棄した。

賢者オンネス

女王アランナの淫蕩を非難したために幽閉された賢者。
女王アランナにかけられた呪いを解くことのできる唯一の魔法使い。

女王アランナ

呪われた女王。数多くの愛人を抱える淫蕩極まりない女性。

セジュン

賢者オンネスを幽閉する牢番の一人。

クリフ

賢者オンネスを幽閉する牢獄の牢番長。

マルガ・シェーマ

賢者オンネスとの契約に応じ、召喚された淫魔。
ギルベルトの願いのために協力する。

第一話

「止めろ！ 見るな！ 見るんじゃないわねえ！」

王都の広場に設置された晒し台の上で粗野な顔つきの全裸の男が拘束から逃れようと手足をじたばたとさせている。

恐らくは盗みか姦通で捕まったのだろう。

この王国では、原則として、他人の物・他人の妻を盗んだ男は全裸にされた上で、男の証である体毛を全て剃り落とされ、定められた刑期を晒し台で過ごすのだ。

この王国において、男の体毛とは勲章のようなものであり、これを剃り落とされ、子どものような姿を晒すというのは、男にとってこれ以上ない屈辱なのだ。

「ちくしょう！

放せ！ 放せよ！」

男が必死に抵抗をする中、刑務官たちが男の頭髪、髭、胸毛と剃り落としていく。

男が屈辱に耐えかねたのか、口を閉じたまま顎を大きく広げた。

「こいつ！

舌を噛もうとしたぞ！」

刑務官が男の頬を押さえて強引にこじ開け、男の自殺を阻止する。

刑務官は慣れた様子で男の口に開口具を捻じ込む。

男は口から涎を垂れ流しながら、それでも何とか死のうと呻いている。

この王国の男にとって、男の証である体毛を失った姿を衆目に晒されるというのはそれほどの屈辱なのだ。

刑務官は男の陰毛、尻毛、太もも、脛毛と剃り落とす。

誇りを失った男が全身を震わせて涙を流す。

その様子を馬上から遠目に眺めていた金髪に青い目の騎士団長ギルベルトは、晒された男の境遇に心を動かされなかった。

この国においては当然のことだったからだ。

成人してもなお、体毛のない男は法において男として扱われず、娼夫と見なされる。

晒し台に拘束された囚人を保護する義務を負うものもない。

群衆が野獣の声を上げながら晒し台の男に群がる。

晒し台の男は公衆便所として王都の男たちの性のはけ口になるのだ。

ギルベルトの脳裏に、騎士見習いの頃の記憶がよみがえる。

初陣で捕えた山賊団を拘束した晒し台で、ギルベルトら当時の騎士見習いは股間の騎士男根の純潔を山賊団の尻穴に捨てたのだ。

ギルベルトは己が捕えた山賊団の頭領が、生まれて初めて男に犯されて泣き叫んだときの表情を思い出す。

討伐隊を幾度も退けた厳つい顔の大男が、ギルベルトの騎士男根で善がり狂い、メスのように泣き叫んだ惨めな姿を思い出すと、ギルベルトの騎士男根が大きくなる。

この国の男にとって、男に犯されるのは死よりもおぞましい恥辱だ。

そして、ギルベルトの騎士男根は剛剣と呼ばれるのに相応しい逸物だ。

精神的苦痛と肉体的苦痛にいい年をして泣き叫ぶ山賊団の頭領の情けない有様に征服欲を満足させたのは懐かしい思い出だ。

群衆の中には、成人を前にした少年らの姿もあった。

晒し台の男も、あの山賊団の頭領のように少年らを男にするための供物となるのだろう。

ギルベルトはそんな群衆を避けるために脇道に入った。

騎士団長であるギルベルトが通るのならば、群衆らは喜んで道を開けることが明らかであるにもかかわらずだ。

晒し台の男に群がる民衆への配慮ではない。

今のギルベルトには衆目を避けなければならない事情があった。

だから、騎士団長の身分であるにもかかわらず、供もつれずに一人でいるのだ。

民衆に知られてはならない密命を帯びて、ギルベルトは広場に背を向けて馬を進めた。

王都から馬で三日。

ギルベルトは参観の洞穴に隠された牢獄の前に辿り着いた。

「ギルベルト様！」

牢番たちがギルベルトの顔を見て、敬礼をする。

この牢獄は、代々の騎士団長とその直属の部下にのみ伝えられる秘密の牢獄なのだ。

「ギルベルト様！」

伝書鳩も飛ばさずにお越しになられるとは、何事でしょうか」

「緊急にして機密の案件故だ。

囚人は生きているな」

ギルベルトの言葉に牢番たちが顔を見合わせた。

まさか、死んでしまったのだろうか。

この牢獄に決して民衆に知られるわけにいかない囚人を投獄してから七年、最後の定期連絡を受けたのは三か月前だ。容体が急変したのだろうか……

「ギルベルト様。

あのお方は……」

「言い直せ」

牢番長のクリフが囚人に敬意を払う言葉を使ったので、ギルベルトは命令した。

「申し訳ありません。

あの囚人は、こう言いました。

今日か明日、ギルベルト様が来訪される、と。

まさか、本当にお越しになられるとは思わず……」

「無駄口を叩かなくてよい。

あの罪人ならば、その程度のことを知るのは容易だろう。

重ねて命令するが、あの罪人について、一切の情報を口外するな。

いいな」

「畏まりました！」

牢番たちが頭を下げたのを見てから、ギルベルトは牢獄の中に進んだ。

「賢者オンネス、俺の来訪を予期していたのなら用件は分かっているな」

「ならば、俺の答えも分かっただろう。」

断る。

穴の開いた桶で水を汲む趣味は俺にはない」

牢獄の最奥部にある、最も厳重に管理された牢の前でギルベルトが呼びかけると、牢の奥の闇の中から朗々とした声が帰ってきた。

この王国の平均寿命である五十歳の倍以上を生きているにもかかわらず、しわがれた様子のない声の張りだ。

賢者オンネス。

二代前の国王からこの国に仕え、現女王アランナを侮辱した咎で幽閉された偉大なる魔法使いに相応しい声だとギルベルトは苦々しく思った。

「罪人とはいえ、貴様はこの王国に忠誠を誓った身であろう。」

ならば、従え。

我らが麗しの女王アランナ陛下をお救いするのだ」

ギルベルトの命令に、牢の奥から笑い声が響いた。

「何が麗しの女王陛下か。」

好みの男と見れば啜えこまずにはいられない淫売ではないか。

貴様も婚約者であった我が弟子シニオンを捨て、あの女の徒花に溺れたという意味では同罪よ」

「黙れ、罪人！」

過去の痛い事実を突かれ、ギルベルトは声を荒げた。

オンネスの指摘通り、ギルベルトは女王アランナの寵愛と当時の婚約者であったシニオンを秤にかけることもせず、躊躇することもなく、女王アランナの寵愛を選んだのだ。

女王アランナは、愛人に女がいることを好まない。

だから、女王アランナの目に留まった男は妻や恋人と別れて寵愛を受け入れるか、妻や恋人とともに冷遇されるか、の二択しかないのだ。

そして、ギルベルトは女王アランナの寵愛を選び、妻を選んだ前騎士団長の後釜としての地位に就いたのだ。

「貴様は我らが女王陛下を侮辱したにもかかわらず、命を生きながらえているのは女王陛下の温情あってのこと！」

女王陛下への感謝の念を忘れた忘恩の亡者が何をほざく！」

「ならば、処刑してみせよ」

激昂に恐れる様子もないオンネスの声にギルベルトは苛立った。

処刑できるものならば処刑をしたい。

それが女王アランナ、そしてオンネスの身柄を管理するギルベルトの本音だ。

だが、偉大なる魔法使いとして人気も高い賢者オンネスを公開処刑に処すれば、現時点では女王アランナの治世を支持する民衆の反発が予想される。

かといって、オンネスを放置すれば、彼の言葉に感化された民衆が女王の治世を乱すだろう。

苦肉の策として、女王アランナとギルベルト、そして女王の愛人の一人である文官クヌムで出した結論がオンネスの幽閉だった。

オンネスが表舞台から姿を消したことについて、民衆は病氣療養だという王家の発表を信じている。

だが、牢番たちは罪人として牢に入れられたオンネスへの敬意を忘れず、言葉の端々にギルベルトらへの不信感を感じさせる。

この秘密の牢獄の番人は忠誠心が高い者の中から、命令に忠実に従う者を厳選しているのだが、それにもかかわらず、オンネスの影響が見られるのだ。

女王アランナたちはいつまでもオンネスを生かすつもりはない。

民衆がオンネスを忘れた頃を見計らって毒殺する算段だ。

加えてギルベルトはオンネスの影響を受けている牢番たちも処分するつもりだ。

余計な噂を立てられては困るからだ。

だから、オンネスの言葉にギルベルトは痛い腹を探られた気がして苛立ったのだ。

「……賢者オンネス。

無礼を詫びよう」

だが、ギルベルトはオンネスに頭を下げることにした。

ギルベルトの知る限り、呪われ、部屋から出られなくなったと侍女を通じてギルベルトに相談をした女王アランナを救う知恵を持っているのは、宮廷魔法使いたちの師でもあるオンネスしかいないのだ。

「儂に頭を下げるとは、よほど困っていると見える。

どうやら宮廷魔法使いたちはあの呪いの解き方も知らぬようだな」

「その通りです。

かつて王国に誓った忠誠がまた残っているのならば、なにとぞ……」

「だが、無理だ」

ギルベルトが下手に出たというのに、オンネスの態度は変わらなかった。

ギルベルトは思わず剣の柄に手をかけた。

「誰が呪ったかは知っている。

呪いの解き方も知っている」

オンネスの言葉にギルベルトは希望を見出した。

魔法使いは嘘をつけないのだ。

それが、奇蹟の力である魔法を行使するために神に定められた条件だからだ。

つまり、女王アランナは救われるのだ！

「だが、実行することは不可能なのだ」

「何故ですか！」

ギルベルトは声を荒げた。

女王アランナが部屋から出られない、となれば公務にも影響する。

公務も満足にこなせない女王となれば、かつて対立候補を擁立していた大貴族らが再び造反するのも目に見えている。

そして、女王の凋落は、女王の権勢に乗ったギルベルトの凋落でもあるのだ。
「あえて、女王と呼ばせてもらうが、この国には女王のために身体を捧げられる者がおらんからだ」

オンネスの言葉にギルベルトは、そんなことか、と思った。

女王アランナの命運はギルベルトの命運でもある。

それならば、身体を差し出すことぐらい、どうということはない。

「ここに俺がいる。

俺は女王陛下の第一の臣。

女王陛下のためならば、いかなる苦難も厭わん」

「ならば誓うがよい。

女王アランナを救うためにその身を差しだす、とな」

「誓おう」

ギルベルトは断言した。

「賢者オンネスが女王陛下の呪いを解くべく尽力する限り、俺はあなたの指示にすべて従おう」

ギルベルトの誓いの言葉に応えるように、牢獄の闇の奥に光が灯った。

「来るがよい」

ギルベルトは牢の鍵を開け、オンネスの誘いに応じた。

小柄な老人ながら、風雪に耐える古木のような風格を放つ老人、オンネスが牢の奥のベッドに座っていた。

「では、呪いの解き方を伝えよう」

重々しくオンネスが語りだした。

「呪いを解くには、我が秘術によって錬成された肉体に宿る魔力が必要だ。

その肉体により女王と交わることができれば、女王の呪いは解けるだろう」

「そのために、身体を捧げる者が必要ということか」

「うむ。

だが、秘術を成すには苦難を伴う。

故に、貴様の決意を確認させてもらった」

「誓いの言葉に偽りはない」

「そうか。

ならば、服を全て脱ぎ、一糸まとわぬ姿になってもらおう」

「何？」

オンネスの言葉をギルベルトは問い直した。

「秘術に必要なことである故、服を全て脱ぎ捨てよ」

「……分かった」

オンネスの言葉にギルベルトは従うしかなかった。

服を脱ぎ、下着も脱ぎ捨てる。

そうして、騎士として鍛え上げられ、女王の寵愛を得た雄の理想形の一つである肉体とそ

れを彩る金色の体毛、そして、股間にぶら下がる皮に覆われた騎士男根を露わにした。

「では、秘術により貴様の肉体の錬成を開始する」

オンネスがギルベルトに向かって手をかざし、魔法の言葉を呟き始めた。

なんだこれは……

ギルベルトは身体が熱くなるのを感じた。

胸板、腹筋、下腹部、太もも、脛……身体のあちこちが少しずつ熱くなっているのだ。

「動くな。口も開くな」

身体の熱さに耐えかねて身動きをしようとしたギルベルトを見とがめたオンネスに制止される。

ギルベルトの身体の異常はそれだけに留まらなかった。

はらはらと、ギルベルトの騎士男根を彩る金色の陰毛が抜け始めたのだ。

それだけではない。

腋毛、胸毛、脛毛など、ギルベルトの雄らしさを象徴する彩りがどんどん抜け、床に落ちているのだ。

ギルベルトの脳裏に、王都で見た晒し台の男の屈辱の様子や、かつて凌辱した山賊団の頭領の今にも死にそうな顔を思い出した。

ギルベルトも死ぬるのならば死にたいほどであった。

この国において、成人して体毛を失った男は恥辱と侮蔑の対象だ。

このような姿を女王アランナに見られては失望されるだけならばまだしも、侮蔑と嘲笑の対象となってしまう可能性すらある。

優れた雄として女王アランナの寵愛を受けているギルベルトにとって、天上楽土から地獄の最下層への転落に相応しい恥辱であった。

だが……

ギルベルトは羞恥で震えそうになる身体を抑え込んだ。

オンネスは、魔法使いは嘘をつけない。

ならば、この恥辱に耐えれば己の地位と女王アランナを守れるのだ。

オンネスが掌を下ろした。

ギルベルトは、髪の毛以外の体毛を失った己の身体を見下ろした。

逞しい胸板、引き締まった腹筋、常人の比ではない股間の騎士男根は皮に守られているままだ。

素晴らしい筋肉美を誇っていたからこそ、雄の証である体毛を失った喪失感が大きく、男らしさを失ったその肉体に、ギルベルトは身体が震えないように自制心を働かせることで精いっぱいだった。

いずれまた体毛は生え揃う。

それまで、誰にもこの恥ずかしい身体を見せなければよいだけだ、とギルベルトは己に言い聞かせる。

「オンネス様、い、いえ、囚人オンネス！」

食事の時間だ」

だが、ギルベルトの目論見はすぐに崩れた。

牢番たちがオンネスの牢にやってきたのだ。

「おお、食事か。

騎士団長殿の分も持ってくるがよい」

「おい、オンネス！」

オンネスの言葉にギルベルトは声を荒げた。

「秘術には時間も必要だ。

ならば食事も採る必要がある」

ギルベルトはオンネスを縊り殺す妄想をしながら慌てて服を着ようとした。

「服を着てはならん。

服を着れば秘術が乱れる」

「何だと！」

オンネスの言葉にギルベルトは叫んだ。

オンネスはギルベルトと共に食事をすると知っている。

牢番が食事の用意をする。

そして、この牢に身を隠す場所はない。

つまり、この恥ずかしく、みっともない肉体を牢番に見せなければならぬのだ！

怒りと屈辱でギルベルトの歯がカタカタとぶつかり合う。

「何を動揺する」

オンネスの言葉にギルベルトはオンネスを殴り殺そうかと思った。

「ここの牢番はよく躰けられている。

先代の騎士団長ダーバル殿の薫陶だろうな」

「あの男の名を出すな！」

ギルベルトはオンネスの言葉に苛立った。

ダーバル。

先代の騎士団長にして、女王アランナの寵愛を拒んだ愚かな男。

あんな愚か者と比較をされるのは我慢がならなかったのだ。

「だが、貴様はダーバル殿に感謝をせねばならん。

ここの牢番の口は重く、秘密を漏らすことはない。

現に、儂がここにいることは噂にもなっておらんだろう」

オンネスの言葉にギルベルトは少しだけ落ち着いた。

そう。

オンネスが幽閉されているという噂すら立たないのは、ここの牢番が秘密を守っているからだ。

ならば、ギルベルトの痴態も黙っている可能性が高いだろう。

「ギルベルト様。

食事を……お持ちしました」

「そこのテーブルに置け」

牢の入り口からやってきた牢番の一人セジュンにギルベルトは命令をした。

セジュンは牢番としては最も若く、ギルベルトより 12 歳年下の 24 歳だ。

そのセジュンの目が一瞬だけ好機と侮蔑に揺らいだのをギルベルトは見逃さなかった。

ダーバルに影響された愚かな騎士たちがギルベルトを見る目と同じ、いや、それ未満の蔑

みの目だ。

セジュンの目は、体毛を失い、男らしさを失ったギルベルトの事情を知らずとも、その醜態を当然の末路として嘲笑っていた。

すぐに表情を整えたが、ギルベルトはセジュンの本心を見逃しはしなかった。

怒りと屈辱と恥ずかしさで震えながらギルベルトは考えた。

殺そう。

女王アランナの呪いを解くことに成功したら殺そう。

オンネスもセジュンも、この牢獄の牢番も全員殺そう。

そうしてこの屈辱と恥辱の秘密を知る者の一切を地上から消してしまおう。

一糸まとわぬ姿を震わせながら、ギルベルトは己に誓ったのだった。

奥付

『雄薔薇無惨 騎士団長媚肉錬金術』のサンプル

初出：2019年11月17日

著者：金目

金目の同人活動一覧

【pixiv】

<https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005>

【DLsite がるまに】

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01002299.html

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】

https://twitter.com/chigaya_deep